



上左—メイン会場へルムハウスでの展示風景 © Manifesta11/Wolfgang Traeger
 上右—サテライト会場であるチューリッヒ大学の展示風景 © Manifesta11/Wolfgang Traeger
 下—フロイヤーが開設する隣接美術館を同時通訳するパフォーマンス © Manifesta 11 / Hoi Bao Nguyen

NEW WORKS 3

シール・フロイヤー
 ロマンズ

スイスの公用語であるフランス語とイタリア語の男
 女の通訳者がライブに登場、フロイヤーが作成し、
 英語で朗読する「隣接美術館」も、観客の前で同時
 通訳した。サテライト会場となった大学では、そのレ
 コーディングをスピーカーで渡し、メイン会場のヘ
 ルムハウスでは2つの可動式同時通訳ブースを左
 右対称に置いた同様の作品を披露。「ロマンズ」は
 右側から置いた同様の作品を披露。観客における
 観歩に誘導するウイットに富むプロジェクトだ。



らないという「ルール」のもとで、
 このような大規模な展覧会が行わ
 れたことはなかっただろう。「職
 業」が違い、なかには国も話す言語
 も異なる者同士が出会い、対話を
 重ねた。展示の構成もまた実験的
 だ。ここに5つの核がある。

1. 市内に点在するサテライト展
 示では、歯科医をホストに選んだ
 トービヨン・ロッドランドが待
 合室や診察室で写真作品の展示を
 行ったように、ホストと展示場所
 が直結するケースもあれば、セッ
 クス・エデュケーターと制作をし
 たアンドレア・エヴァ・キユリは、
 ランジュエリー・アティアックでド
 ローイングの展示を行うなど、プ
 ロジェクトのアイデアを拡張させ
 たケースもある。このほかに大学
 やバー、観光局、墓地など会場は街
 に点在し、オープン日時もまちま
 ちなため、展示を回るのは楽では
 ないが、ホストや会場で出会う
 人々と交わす会話は新鮮だ。



NEW WORKS 2

フランツ・エアハルト・
 ヴァルター
 半分にしたベスト

1960年代からテキスタイルを使った作品を愛慕し、
 69年に行われた伝統的「態度が別になる」という展に
 も参加したヴァルターがホストに選んだのは、生地
 製造者、ヴァルター・ドローイングで表現したアイ
 デアをもとに、そのデザインが具現化された。美術
 展では、通訳を京平ドローイングや衣服をコンセプ
 チュアルな手法で展示。またサテライト会場となっ
 たホテルでは、ウエイターやボーター、レセプション
 の従業員たちが作品の衣服を身につけた。



上—サテライト会場であるホテルで、作品であるベストを着用する従業員 © Manifesta11 / Wolfgang Traeger
 下左—ヴァルター（右から2人目）と生地製造者トーマス・ドイチエンハウワー（右） © Manifesta 11
 下右—メイン会場ルムハウスでの展示風景 © Manifesta11 / Wolfgang Traeger

制 作の過程アーティスト、そ
 の作品に携わった人たちの
 思考とコミュニケーションに焦点
 を当てた「マニフェスタ11」アー
 ティストで本展のチーフ・キュ
 レーター、クリスチヤン・ヤンコフ
 スキーは、「お金のために何をする
 か?—いくつかのジョイントベン
 チャー」という一風変わったタ
 イトルを掲げた「NEW WORKS」
 というプロジェクトに招待された
 30人のアーティストたちはまず、
 1000を超える職業リストから、
 自らの「ホスト」を選び、チェリヒ
 で働きながら生活をする彼らにと
 もに制作を行った。そもそも作品の
 多くが、作家ひとりの手で作られ
 ていないことは明らかであり、1
 986年にヤン・フットがケントの
 58戸の民家で行った「Cubofes
 ぴ、アムニ（友人の部屋）」展をはじ
 め、展覧会が美術館の外へと展開
 してから久しい。しかしこれまで、
 アーティストが異なる職業の人々
 と手を組み、制作をしなければな